

2008年度奨励賞の受賞者決まる

受賞者：小寺裕之（函館海洋気象台，現所属：気象庁観測部）

研究題目：渡島・檜山地方の突風に関する量的予報プログラムの開発と利用

選定理由：小寺裕之氏は2000年に気象大学校に採用の後、2004年に函館海洋気象台に赴任し、2008年3月から気象庁観測部に勤務している。小寺氏が函館海洋気象台に在職中、北海道では2004年第18号台風による強風被害を始めとして、2006年10月7日～8日や2007年1月7日～8日にかけて急速に発達した低気圧による強風被害が相次いで発生しており、突風など強風に関する防災気象情報の充実が望まれていた。強風災害（竜巻等は除く）は、おもに最大瞬間風速によって引き起こされるが、小寺氏は、気象官署の突風率と予想パラメータを各官署毎に観測データから求め、風向別に最大瞬間風速を導く手法を開発した。強風時の突風率は地表面粗度に大きく依存し、空気力学的粗度長が大きくなるほど増加する。小寺氏は、災害をもたらすような強風時の最大瞬間風速を量的に予測するために、近年完備されてきた約100 m 平方ごとの土地利用区分が掲載された国土数値情報を利用して、北海道内のすべての地上気象官署と、渡島・檜山支庁内のアメダス地点について、風上側約1～2 km までの平均的な地表面粗度を風向別に求めることを行った。さらに、先行研究

に基づき、空気力学的粗度長と風速の測定高度から推定される突風率の予測値と、これら気象官署における観測値との比較を行い、この予測の有効性を確認し、官署毎のパラメータを求めた。また、積雪により地表面状態が変化することがどう突風率に影響するかについても調査を行い、風速計の設置高度が20 m 以下である場合に積雪は突風率を小さくすることを見出した。この結果は現在予報・注警報発表作業に活かされており、今後アメダスの風観測環境評価に用いることも考えられる。

小寺裕之氏は研究を本務としない一地方官署に勤務しながらも、高い科学的意識で研究を行い、さらに関連分野の研究者へ積極的に助言・議論を求めており、今後の発展が大いに期待される。

以上の理由から、日本気象学会は小寺裕之氏に2008年度奨励賞贈るものである。

参考文献

小寺裕之，佐藤悦信，金森祥一，2007：渡島・檜山地方の突風について（その1），平成18年度札幌管区気象研究会誌。

小寺裕之，佐藤悦信，金森祥一，2008：渡島・檜山地方の突風に関する量的予報プログラムの開発と利用，平成19年度地台業務改善プロジェクト報告書。